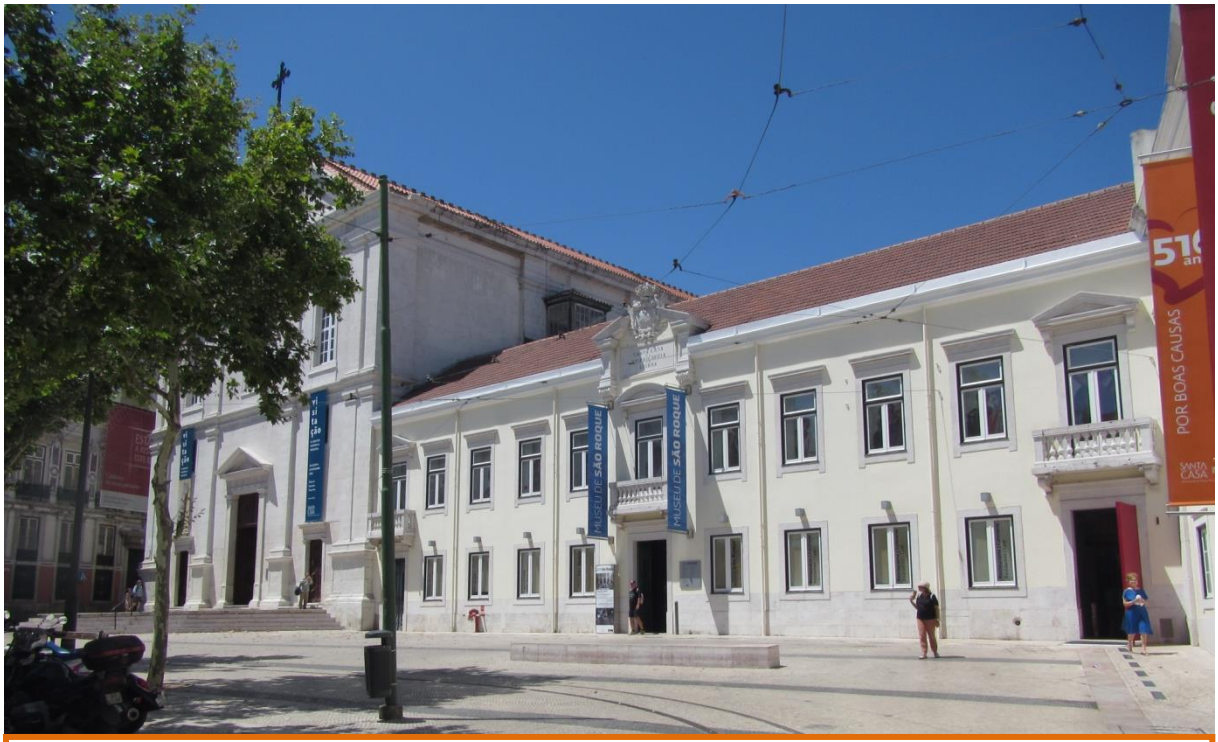
5. 少年たちの興奮

伊東マンショ達のことを考えている。１６世紀の日本人にとっての世界史上の大きな出来事の一つが天正遣欧使節であったことは間違いない。日本を出るときにはまだ１３歳だった彼らが、リスボンに着いた時には１５歳になっていた。今日で言えば中学生である。長崎市が国連などに派遣する青少年平和親善大使も、ニュースで見る少年使節と同年代の彼ら彼女らの活躍ぶりは、大使の名に恥じない素晴らしい子ども達ばかりであるが、伊東達４人の少年達もまた、今から４００年以上も前の親善大使であり、その役割を十二分に果たした立派な外交官たちであった。その優秀な１５歳の少年達の目に、１６世紀のヨーロッパはどのように映ったのであろうかということを考えている。



リスボン中心市街地の丘の上に立つ、サンロッケ教会と、その横の旧修道院、現在は宗教美術館になっている。伊東マンショ達はヨーロッパ大陸の最初の夜をここで過ごした。興奮と緊張の連続だったであろう１日の終わりに見た夢はどんな夢だったのだろうか。

今朝もまずロシオ広場の「カフェ・ニコラ」で朝食をとった。それからすぐそばのロシオ駅に歩いて行き、列車でシントラに向かう。シントラ駅からはバスに乗って急坂を上り宮殿前に出た。天正遣欧使節の少年達はリスボン市内のサンロケ修道院の宿舎から、ポルトガル副王差し回しの馬車でここまで来ている。ポルトガル副王への表敬訪問という華麗な外交イベントである。当時のポルトガルは１５８０年にスペインに併合されたばかりで、スペイン王フェリッペ２世（ポルトガルではフェリッペ１世）が常時不在の王であり、彼の息子のアルブレヒト大公が初代副王としてシントラの王宮にいた。

王宮はおとぎ話の世界のお城のように可憐で美しい。この山上の王宮の外観を特徴づけているのは、高さ３３メートルもあるというドーム状の煙突である。それもそのはずで、

この王宮はイスラム統治時代にアラブ人によって築かれた城に増改築を繰り返して来たものである。煙突はまるでモスクのミナレットのようにエキセントリックに聳え立っている。ところが内観を特徴付けているのは、ポルトガルの代名詞にもなっているタイル（アズレージョ）である。１６世紀の富裕を華麗な建物を建てることに費やした例の「幸運王」マヌエルが贅を凝らして彼の好みの装飾で飾り立てている。

伊東マンショは安土城も、まして大阪城も見ていない。しかし、守護大名の館である大友宗麟の府内の館は見ていたであろう。宗麟の傾奇（かぶき）と田舎大名である彼の京・上方への憧れからして、当然、その館は狩野派の描いた金銀をはじめ高価な顔料をふんだんに使った襖絵で飾られていたはずである。それも薩摩軍入寇と、その後の混乱によって、今となってはその絵がどんなものであったかは知る術もないが。しかし、いくら当時の狩野派の絵に目が肥えていたとしても、シントラ王宮の内装は少年達を大いに驚かしたことだろう。タイルの壁画だけにしても、使われている顔料の酸化コバルトを呉須と呼び、それを釉に使った陶磁器は呉須手と呼ばれている。また、日本では染付、中国では青花と呼んでいた。さすがの伊東マンショも高価な瓶や茶器としてなら見ていたであろう。それが壁一面に一枚の絵として飾られている。どの時代の子ども達でも、彼らが驚いた時やるように、息を呑んで顔を見合わせたであろう使節団の一行の姿が、シントラ王宮のどの部屋に入っても目に浮かんで仕方がなかった。

王宮前には観光用の馬車が客待ちをしていたが、わたしはバスに乗りこんだ。イスラム時代の山城に行くためである。７~８世紀にムーア人が築いたとされ、１２世紀にポルトガルが建国されレコンキスタの戦いで奪還した後、再奪還を恐れていくらかは手を入れたらしいが、ポルトガルのレコンキスタが完結すると、あまりに急峻な地形から廃城になったらしい。ムーア人が築いた石垣は九州に多い山城を髣髴とさせるが、土塁かせいぜいが野面積みの当時の日本の山城とは、その規模も堅牢さも比べ物にならないほどである。

ムーア人とは本来は北アフリカ一体、地中海の南岸に広く住んでいた人々の事であるが、この時代のイベリア半島では、イスラム教徒全体を指している。ローマ文明が消滅した後、大規模建造物や都市インフラの技術を発達させていたのは、ヨーロッパ・キリスト教文化

このユーモラスな煙突はイスラム文化の置き土産である。真下には王やその招待客のための食事を作る調理場があった。

ムーア人の城からペーナ宮（向かって左）が見えている。山上にこれだけの城壁を造る技術を持つイスラムの凄さを、これ以降も見せつけられた。

圏ではなく、イスラム文化圏であったことは、イベリア半島の多くの場所で思い知らされたが、わたしの最初のイスラム技術開眼の地はこのシントラであった。

ムーア人の築いた山城のあと、そこから見え隠れしていたペーナ宮にも行って見た。当時のポルトガル女王マリア２世の夫フェルディナント２世が、１８８５年に完成させた離宮である。彼はシンデレラ城で有名なドイツのノイシュバンシュタイン城を造らせたドイツ王ルートビッヒ２世の母方のいとこにあたる。わざわざドイツから技師や職人を招いて建設させただけあって､雰囲気はノイシュバンシュタイン城に似ている｡色々な時代の色々な様式を取り入れているが、それがかえって不思議な統一感を雰囲気を醸している。

もちろん、１６世紀の少年達の目にとまった城ではないので、今回のシントラ訪問の目的には外れている。しかし、わたしはこの可愛い城がとても気に入った。シンデレラではなく白雪姫が、７人の小人たちとともにスキップしながら登場しそうだと錯覚して心地よかった。

しかし、この城にも実は哀しいエピソードがあったのだ。立憲君主制末期、この離宮の最後の主となったアメリア王妃は、夫であるカルロス１世と長男ルイス・フィリッペの二人を暗殺されている。残った次男マヌエル２世も、結局持ちこたえることができず１９１０年の共和制革命に王政は倒れ、母とともに亡命することになる。主を失ったこの離宮には、夫や息子の死後、世捨て人のように引きこもったまま最後は国を捨てざるを得なかった、ポルトガル最後の王妃アメリアの悲哀が満ち満ちていると感じるのは、わたしだけだろうか。

少年使節団を驚かしたであろうタイルの壁画。シントラの王宮にはテーマを変えて、タイルの壁画に飾られた部屋がいくつもある。彼らがこの王宮のどの部屋を寝室として与えられたかは分からずじまいだったが、どの部屋で寝たにせよ、彼らが起きながらにして夢の世界にいるという錯覚に陥っていたとしても不思議ではあるまい。４人の子ども達の帰国後の運命と自身の身の振り方は様々ではあったが、このシントラでの体験は、間違いなく忘れられない人生の一頁だっただろう。